

原著 (Article)

## 高等学校における「進学校」の風土と文化

Diversity and originality of career guidance activities  
in high schools

高橋 伸行\*  
TAKAHASHI, Nobuyuki\*

### 要 旨

「進学校」とひとくりにされる高校にも、各々独自の校風、指導方針が存在する。求められる進路指導、適切な進路指導とは何かを現場視線から考察した。

キーワード：進学指導、伝統校、新設校方式、都市部、郡部

Key words : career guidance activities, entrance exam, old-established high schools, younger high schools, urban style, suburban style

### 1. はじめに

筆者は公立高校の教員である。某年、異動内示があった際に、同僚から「これから大変ですね」と声を掛けられ戸惑った。当時筆者はある地方都市の専門高校（かつての名称でいう職業高校）に勤務していた。内示先は県庁所在地に立地する、歴史の古い、「中堅どころの進学校」であった。のどかな校風（あくまでも指導様式の相違であり、教育に対する熱心さの差異ではない）を想起する筆者と、「猛烈な」進学態勢を連想する同僚との間で、暫時会話が噛み合わなかった。同僚が商業科の教員で、普通科高校の経験がないということもあるのだが、地区（地域）ごとに「進学校」というものに対するイメージが異なること、また、進路指導に関する個人の経験が様々であるということを改めて認識するできごとであった。ひと口に進学校といっても「文化の違い」が存在するのである。

生徒にとって満足のいく進路指導とは、あるいは受益者の主観を補正してなお、社会的にみても公正な進路指導とはどのようなものか。いわゆる進学校における進路指導のありようを現場の感覚を通して考察してみたい。本来、単純に「進路指導」＝「進学指導」ではないが、本稿では、進学指導に限定して論考をすすめる。

## 2. 校風と進路指導

### 2-1. 所変われば

全国の進学校を見渡すと、地域の実情に応じた、あるいは学校独自に開発工夫をおこなった指導法の実践がみられる。事例をひとつ引こう。東洋経済 2006 年 10 月号「名古屋「ブッチ切り」の深層」特集の中の一記事、「公立王国愛知県」である。東京では私立中高一貫校に都立高が進学実績において水をあげられ、都教委が都立の「進学指導重点校」を指定し地位挽回をはかっている。それに対し、3大都市圏でありながら、愛知県においては公立高校が高い進学実績を挙げている不思議を取材している。

ここで取り上げられているのは、ともに旧制中学の流れを汲む2校である。片や自由と自主自律（自立）という校是を時が移っても貫き通す、県庁所在地に立地する高校。他方、三河西部のトップ校として、懇切丁寧な指導で進学実績をあげ、私立高の特進コースと拮抗するような進路指導戦略をとっている高校である。経済誌ゆえ、教育学的観点ではない視点・視線で正反対の進路指導方針をとる有名校2校の躍進ぶりを屈託なく紹介しているのだが、はからずも進路指導方針の多様性の記録になって興味深い。今さらではあるが「進路指導文化」の違いが同一県内の公立高校同士にも存在する。

### 2-2. 分類試論

望月（2002）は首都圏の公立普通科共学校を、①生き方指導重視型、②受験指導重視型、③生き方指導・受験指導ともに重視せず型、に分け進路指導の効果について考察している。筆者は自身が生徒として、あるいは教員として、全ての類型における経験を持つ。その体験を分析手段として、本稿では愛知県立高校の、いわゆる進学校といわれる普通科高校に着目し、進路指導文化を系統付けしてみよう。ここでは、望月の分類とは異なる3つの座標をたてた図式化を試みる。なお、県庁所在地である名古屋市には県立高校以外に名古屋市立高校も存在するが、こちらはまた独自の学校文化・風土をもつため、本稿の対象からは外してある。

#### [座標軸1：歴史]

伝統校（旧制中学の流れを汲む学校とする）あるいは既設校（新制高校発足時に誕生した学校とする）であるか新設校（愛知県においては昭和40年代に設立された高校群も含めて慣例的にこう呼称するため、この用法に従う）なのか。歴史性は学校教育哲学・運営方針に影響を及ぼす。

#### [座標軸2：立地]

都市部であるか郡部であるか。義務教育のような学区とは異なるが、学校所在地の違いは高校へ求めるもの・期待の違い、思い描く高校像の違いとして現れる。

[座標軸3：高校ランキング]

受験産業の作成する高校入試ランキング上で、「上位校」（さらにサブランクとして巷間いうところの「トップ校」か「二番手」校か）あるいは「中堅校」かということは地域・社会からの評価・評判，入学者学力の指標として考えてよいであろう。

この3軸で構成される概念空間内での位置づけが，各学校の進学指導文化を表していると考えられる。以下の分析はあくまでも筆者の経験・見聞に基づいてステレオタイプ化したものであり，当然，細部では，個々の学校の状況に違いがあることをあらかじめお断りしておく。

**2-3. 都市部一郡部軸**

都市部（ここでは県庁所在地を想定している）の高校では学校側・生徒側双方に「適切な距離」を置こうという傾向があり，自主・自律の気風がみうけられる。大都市ゆえ老舗・大手予備校への通学に苦勞がともなわず，生徒がそれらに通うことにさほど頓着しない。

一方，県庁所在地以外の都市を含むいわゆる郡部の学校は，面倒見よく，緻密・丁寧を基本方針としている。「学校の指導を信じてついてくることが成功への道」という理念のもと，徹底した受験指導を通じ，受験産業に頼らなくても学校だけで十分な「受験学力」をつけさせる。そうした態勢に対する地元の期待，信頼も大きい。進学指導方針は先の望月（2002）の分類②にほぼ一致する。

**2-4. 伝統校一新設校軸**

新設校では低学年から文系・理系のコース分けを行い，授業以外に，早朝・放課後，長期休業中の進学補習，詳細な入試問題分析・対策，頻回の小テスト実施，大量の家庭学習課題，受験産業の模擬試験の校内実施等，生徒にとっても教員にとっても非常に濃密な生活である。かつて新設校に於いては，規律ある生活による学習への集中度向上をめざし，細かな校則を徹底して守らせるゼロトレランス指導が分かちがたく結びついていた。

一方，新制高校が発足して60年を経てもなお，伝統校には，独特の矜持があり，学校側が「必要以上に手を出さない」傾向がある。こちらの進学指導方針は，先の望月の分類③に系統的には近い。後述するように，この軸の寄与は小さくなる傾向がみてとれる。ちなみに，新設校が学校行事を精選し，学校主導で運営していた（その後既設校に近い形に変化した学校もみられるが）のに対し，規模の大きな学校行事が開催され，それらにおける生徒の裁量を大きく認め，校則指導に関しても比較的寛容な傾向がみうけられる。服装指導等に関する寛容さに対しては，勉強ができさえすればいいのか，といった学校の躰，生徒指導上の論争にしばしば発展する（生徒・保護者からすれば，「勉強のできる（学校の）者は自由も手に入れる」，といった感覚である

うか)。このように、進学指導態勢の色合いの違いは進学指導、学習指導方針以外の要素にも結果的に連動している。

## 2-5. 高校入試ランキング軸

一般には、中位校において、手厚い指導を必要とするため、より学校の関与が強くなると思われがちである。しかしながら、郡部においては、2-1でみたように上位校がより高い進学実績（旧帝大や有名私大の合格者数）を目指して、むしろ非常に綿密な指導態勢を組む。したがって、この変数は郡部においては進学指導態勢に直線的な効果をもたらさないとされる。

## 2-6. 時代とともに

2-2、2-3で見たように、生徒自身の内発的要素と、受験対策のアウトソーシング（＝予備校通いの容認）に頼る「都市・伝統校」を一方の極、学校主導・牽引力が特色の「郡部・新設校」を他方の極として、歴史の深さ／浅さ、大都市からの距離勾配が複合してグラデーションが成立していた。

発足当初の新設校にとっては評価確立が至上命題であったため、既述のような綿密な指導で地元地域の要請に応じてきた。通学域が重なり、かつ高校入学ランクが同等の高校では、高校入学時の評定が同じでも、入学後の進学指導の違いに起因して（いとされる）「出口」＝大学進学実績（国公立大、有名私大への現役合格者数）での差がつくことが間々ある。地域社会、保護者、中学校の評価は非常にシビアである。そのため、進学実績という指標で、高い数値を維持し、地元の信頼を得ることは不可欠要因である。こうして着実に実績を上げる新設校方式になった進学指導哲学や方式は既設校、郡部では伝統校へも波及していった。

今回、3軸で構成された各象限に具体的な各進学校を配列することは行っていない。そのような図式化を行えば、象限内で学校が特定のベクトルをもって収束して行く傾向がみてとれるであろう。こらえて待つ／見守るという自制が効かなくなり、校風・文化の違いが薄れていこうとしていると捉えるべきなのか、これまで生徒の自主性尊重の名の下に胡座をかいていた姿勢からの改革と見なすべきなのかといった視点からの議論の端緒として提示したい。

都市部の学校や既設校にみられる、「手をかける」流れは「今の生徒は自主的に動く姿勢に欠ける」という（未検証の）感覚、「成果を数字で示す」という社会的圧力の高まる中、いっそう拍車がかかっていくと思われる。従前の公立学校がさしたる検証を受けることなく民間の人々からみれば「甘えて」いた、という側面は否定できないかもしれない。他方で、単純な定量評価になじまない部分を有するのが教育という営みであると考えられ、何もかもを表面的な数値のみで評価、断罪していくことには危険性を感ずる。

ちなみに現在では進路保障の方略の違いとしかみられないが、新設校が用いた方式

はその成果に注目した関係者にとっては成功モデルとして模倣の対象となっていく一方、単に受験技術にとどまらず、自己啓発系書籍の内容と親和性の高い哲学が垣間見られる手法や、学園紛争対策の影をみた教職員組合やリベラル系マスメディアからは糾弾すべき対象として特別な意味合いをこめて「新設校方式」と呼ばれ、認知されていった。社会背景は大きく変化したが、進学指導充実のための態勢は残存、定着した。政治の季節が終焉を迎えて久しい今、指導態勢の違いに関して、政治色をそぎ落とされたより実質部分の議論が可能となるのではないか。

### 3. 評価・分析

#### 3-1. 進学指導はいけないことなのか

「受験体制」批判もあるが、一心に学習に励むことにより、努力する姿勢、忍耐力が身につく。あわせて自らの限界・適性に対する気づきもたらされる。よしんば目標達成できなくとも、失敗の経験とその克服を期待できる。つまり刻苦勉励が生徒自らに成長をもたらすとする観点である。そして何より知的な伸びを手に入れられる。ただし、量とスピードを至上命令とする学習スタイルは皮相的で学問的な深みを欠くという立場に筆者は立つ。

一方、以下のようなことも指摘できる。受験産業の模擬試験の結果、他校のデータとの比較で一喜一憂、競争意識をかきたてられ、いつの間にか、不毛な数値争いにとられる。ひいては、売り上げ競争のような数稼ぎに奔走、極論すれば「100名合格の実績」ならば、数字の上では100名目がA君でもB君でもいい、という感覚麻痺に陥りかねない。

また、熱心な指導を心がけるあまり、先回りの指導、際限のない面倒見に陥り、生徒の内発的、自主的行動を適切に育むことを阻害、生徒の子供化を助長してしまうのではないかという議論も現場ではみられる。出発点は個々の生徒に対する使命感・愛情の発露ではあるのだが、「合成の誤謬」の罠に陥っている事例が少なくないと筆者は考えている。

#### 3-2. 生徒の立場から

ある教員向け情報誌に「こんな進路指導をして欲しかった」、という声が紹介されている（リクルート、2013）。進路指導をしてもらった記憶がない、担任からの受験学力優先、「目指すべき大学ありき」といった指導に不満、反発をおぼえたなど、現場にとって耳の痛い訴えである。学問分野別ガイダンス等の工夫をこらす高校が多くなっているはずであるが、このような怨嗟の声が生まれることは現場にとっては大いなる反省材料である。

従来、とかく批判的となりがちなのは、受験指導偏重の指導体制をとる学校である。しかし、冒頭引用した、望月（2002）の分析によれば、目先の大学入学に関心が

収斂しがちなのは、受験指導重視型の高校より、むしろ生徒・保護者の意向を尊重する自主・自立重視型の高校であるという指摘がなされている（ただし、調査対象が限定されているので一般化には注意を要するが）。生徒にとって進学指導が有効であるためには、動機の明確化が不可欠であるとの指摘（八木ら、2000；楠見ら、2008）がある。効率的な学力向上圧力に振り回されがちであるがゆえに、大きな視野での、幅広い進路指導に生徒らの期待が寄せられていること（リクルート、2013）にいつそう意識的であらねばならないであろう。

### 3-3. 進路指導観の二極化

公立学校の強みは、横方向では県単位・各地区で構築される分野ごとの研究会、そして定期人事異動というネットワークであろう。これにより文化の水平伝搬が起こりうる。後者は風通しの良さを保障する反面、学校文化アイデンティティーの保持という面での弱みともなりうる。縦方向にみた、教委管轄下にあるという体制も、支援の保障／裁量枠の制約といった両面性をもちうる。

その点でみれば、国立校は縦横いずれの編み目からも自由で独立独歩の存在であるがゆえに、公立校のもつ利点を有することができない反面、その個性を維持しやすい。筆者がかつて勤務した国立大学附属高校では、公立とは一線を画す、リベラルな教育観が生きており、「受験エリートを育てない」ことを標榜していた。望月の分類①の系統に属する高校で、公立進学校にはみられない、自らの将来を見据えた活動に十分な時間を割いていた。筆者赴任時、望月（2002）も指摘する「「生き方指導＝プラスの効果」「受験指導＝マイナスの効果」と二極化して捉え」てしまう感覚が顕著であり「進学指導＝偏差値教育」という短絡が残念ながら残存していた。

卒業生らは、学校特設教科の多い研究校らしいユニークな能力を、大学において評価されるようになっていった。ただし、そうした評価を得られるようになり、卒業生たちの満足度も上昇するようになったのは、進学実績という形で進路保障、学力担保がある程度見え始めたからこそのことであると推察される。検証が難しいが、異なる進路指導観のせめぎ合いを経た上で、「受験指導が大学に合格させるための勉強を盲目的にさせるだけのものではな」いこと（望月、2002）が教員集団内にある程度受け入れられることが重要であったと考える。やや特殊なケースであるが、望月の分類①タイプの学校における進路指導を考えると、興味ある一例ではある。規模等は全く異なるものの、公立高校の事例（荒瀬2007）との対比は、こうした事例理解の一助となるであろう。

### 3-4. 進路指導の落としどころとは

いわゆるトップ校といわれる高校の生徒であれば、自主自立の方針もある程度有効であると推察はされる。問題は上位の中以下の高校の生徒にはそれが通用しないであろうことである。今後の検証が必要ではあるが、現場感覚からすれば、学校側の進学

指導が最も顕著に効果をもたらすのは、中堅とされる進学校においてであると思われる。先に触れた、望月（2002）の研究も高校入試ランキングでいう中位クラスに関する結果であることに注目してよいであろう。

近年の経済力・社会的階層と学力の関連についての指摘（例えば、荊谷，2012）を考えると、学校が面倒見よく指導することは格差を生まないという意味に於いて重要である。自分の進路は自分で、という方針は、意図とは関係ない形で社会的格差を容認してしまう落とし穴を包含している。かつて都市型伝統校が、学校とはあくまでも純粋な教科指導を行い、人格陶冶につとめる場であるとのポリシーを貫けていた一つの要因は、アウトソーシング(予備校)が可能という立地条件と学校の建前が噛み合っていたことにあるかもしれない。東京大学に入学する学生の出身家庭の階層性が話題になったことがあったが、東京大学に合格するような生徒は特定の高校出身者であることを考えあわせれば、公立高校といえども、高校入学の段階ですでに社会階層差が存在すると思われる。アウトソーシングに頼るというならば、予備校に通う経済力を有する家庭の子供である必要がある。つまり、そのような「良家の子女」を集めることができる大都市伝統校であればこそ、自主自立を重んずるという方針がさほどの問題を露呈させず成立してきたとも考えられる。

#### 4. 進路指導のこれから

本稿でみてきたような進学校文化は、現行方式での大学入試を突破せんがために形成されてきたものである。生徒を送り出すという責任を高校が負っている以上、どのような入学試験方式が実施されようとも、高校側は今後ともそれに対応する戦略を編み出していく。折しも、センター試験を廃止して、新形式の入学者選抜方式の導入方針を文科省が表明している。新試験で学力担保をしておきながら、面接等、受験生の「本質的」な適性をみようというものであるようだ。学力で不合格になったのであれば、力が及ばなかった、勉強不足であった、と自分の中で折り合いもつけられよう、周囲も掛ける言葉があろうというものである。学力でない部分で不合格になった生徒にとっては、人格を否定されることになり、かえって残酷な選抜方法であるともいう見解（鷲田，2013）に賛同する。大学とはそれほどまでに高邁な精神、健全な肉体、高潔な人格を持っている人間にしか、門戸を開いてはいけない存在なのであろうか。また単純な学力以外の特技・資格の保有等が評価対象になるとすれば、そのようなものを手に入れる機会に恵まれる社会階層に有利な選抜とならないだろうか。

かつて、ある会合で従来型のいわゆる学力試験ではない選抜について話し合いをしていた折、ある大学教員の発言に困惑、失望したことがある。短絡的に正解だけを求めようとする姿勢に物足りなさを感じるといいながら、一方でセンター試験は解けるよう学力を保障しておいて欲しいという。大学は、何を高校に、生徒に求めたいのであろう？

新学習指導要領への対応をとりあえず終えたばかりの進学校は、ほっとする間もなく、新試験に対応する態勢作りに追われ、混乱に巻き込まれて行くことになるのであろうことは想像に難くない。これまで進学校は入試への「対抗措置」をとることを要求され続け、大学入試の顔色窺いで教育内容を規定されてきた。その逆に、少子化を受け大学側が高校の顔色窺いをするような傾向を最近感ずるようになってきている。

そもそも進路指導とは大局的多面的に将来を展望させる（あるいは、そうすることができる能力を刺激する）ことにあるはずである。その一ステップである大学への関門＝手段が、究極の目的に陥ってしまっている状況に、違和感を抱く関係者が多いからこそ、これほどまでに進路指導が話題とされ続けるのであろう。これを絶好の契機として大学と高校の間で、本質的な教育の連続性を構築していけないものであろうか。

## 5. おわりに

今や学校教育も「費用対効果」といった視点から逃れることができなくなっている。このような風潮の中、2-5で指摘したように、進学校は今やタイプを問わず、こうした社会的な期待に答えねばならないというある意味強迫観念のもと、より効率第一主義的な進路指導態に移行していこうとしている。

前半で示したような、地区が異なることでの、現場職員の抱く驚きすら、平板化が進むことで消失していく傾向にあるのだろう。そのことは、教育の均質化・平等化という意味合いをもつのであろうが、一方で全ての高校が、「大人を育てよう」とする視点を失い、「子供の面倒をみる」色合いが強まり、学校としての個性を失っていくことと同値であるとも筆者は捉えている。

学究的なキャリア教育という立場からなされてきている進路指導に関する研究と、受験情報誌で扱われるような実践報告・分析とは、互いに交わりをもつことがないまま今日に至っているであろう。単なる受験体制批判でもなく、業績礼賛でもなく現実を冷静に見つめた、巨視的な研究が今後活発になされることを期待したい。

### ■引用文献

中高一貫の私立を陵駕。愛知「公立王国」の理由「週刊東洋経済 2006年10月7日特大号」東洋経済新聞社

望月由起（2002）生徒のキャリア展望に対する高校の進路指導の学校教育効果に関する一考察。進路指導研究, 21(1)：15-22.

リクルート（2013）キャリアガイダンス 2013, Vol. 19.

八木晶子, 斎藤貴浩, 牟田博光（2000）高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析。進路指導研究, 20(1)：1-8.

楠見孝, 栗山直子, 斎藤貴浩, 上市秀雄（2008）進路決定における認知・感情過程—高校から大学への追調査に基づく検討一。キャリア教育研究, 26：3-17.

荒瀬克己（2007）「奇跡と呼ばれた学校」朝日新書（朝日新聞社 東京）



苅谷剛彦（2012）学力と階層. p. 30-34, 朝日文庫（朝日新聞出版 東京）  
鷺田清一（2013）中日新聞 2013年 11月 13日朝刊文化面.

■進路指導の現場を理解するための参考資料

---

Guideline 各号 河合塾／全国進学情報センター 東京  
VIEW 21 各号 ベネッセ教育総合研究所 東京  
Career Guidance 各号 リクルート 東京